

異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての 「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題（11）

異文化コミュニケーション教育における「幸福」（2）

青 木 順 子

Happiness in Intercultural Communication Education (2)

Junko Aoki

幸福に生きることは、人間の自己実現に密接に関わる。それゆえ、幸福に生きることの実現は、異文化コミュニケーション教育が、「教育」として、教育を受ける者の自己実現の達成を手助けする限りにおいて、その目的の一つから外すことは出来ない。同時に、幸福という考えを扱う時、個人の幸福感という主観的な感情の充足と、そこに存在する大多数の個人の多種多様な幸福が実現するような、社会全体として見た時の幸福感の存在、すなわち、幸福なる社会の実現、そして、その範囲をさらに広げ、「異なる人々」の属する社会における幸福の実現、という観点を、どのようにお互いに関わらせ、扱うのかという問いが、「異文化コミュニケーション」の「教育」という性質から、必然的に出てくる。その問いに答えていく最初の段階として、前稿¹⁾では、個人の幸福なる感情が充足する、言い換えれば、個人が幸福に生きることの実現ということは、異文化コミュニケーション教育においてどのように扱われるべきなのかについて考察を試み、自分を生かす最善の選択をなし得た場合でさえも、自分自身が苦悩するだけでなく、時には愛する他者をも失望させ苦悩させることがある人間であるがゆえに、異文化コミュニケーション教育で個人の幸福なる感情の実現を扱う時には、まず個人の選択に伴う苦悩を考えさせていくべきであるとした。しかし、異文化コミュニケーション教育で、幸福なる社会の実現に対する個人の姿勢や選択をどのように考えるべきなのか、そして、それは個人の幸福の選択とどのように関わるとすべきなのか。こうした異文化コミュニケーション教育における、幸福なる社会と個人の幸福の選択との関わりについては考察し残したままとなっている。本稿では、その点について、前稿に引き続き論をすすめていきたい。

1. 幸福の質の変化

幸福なる社会の中での個人の姿勢や選択を考えていくために、一つの物語をここで使用してみ

1) 青木順子 「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（10）—異文化コミュニケーション教育における『幸福』（1）—」安田女子大学紀要 No. 36, pp. 57-69, 2008.

たい。オスカー・ワイルドの *The Happy Prince* (『幸福な王子』)²⁾ である。人々に賞賛される美しい銅像である王子が、越冬のため南に向かう途中で一夜の宿を銅像の下に求めたツバメに、自分の身から宝石を取って、街の貧しき人々に届けてもらうことを頼んだことから始まる、おそらくストーリーを知らない人はいないであろう有名な物語である。“happy”「幸福な」という形容詞を題名に冠されるために、「幸福な」という言葉の連想でこの物語を浮かべる人も多い。その題名ゆえに、物語を読む時に無意識に幸福なるものを期待してしまうのにも関わらず、読み終えて自明のことと思っていた幸福とは何なのかを自分に問いかけてしまう者も多いであろう。結局、作者であるワイルド自身の意図が何であったにせよ、『幸福な王子』という物語は、何を持って『幸福な王子』であるのかを読む人に考えさせてしまい、ひいては、幸福の普遍的な定義についてまで再考させないではいられない物語となっているのである。

実際には、子どもの時にこの物語に接する者がほとんどだと言っているであろう。そうした子どもの一人でもあった私は、この物語を家にある児童文学全集に入っているという理由で読んだだけで、全集に入っている他の物語はかなりの回数読み返したのにもかかわらず、これだけは後で自分から読み直すこともなかった。美しいお話だとは分かるのだけれど、あらためて読むのをためらわせるような話でもあったのだ。それでも有名な話であるために、何らかの読書の機会に遭遇することになって、仕方なくとも言える状況でまた読むということが子ども時代に何度かあったと思う。その時には理由を意識したわけではないし、言語化することも出来なかったのだが、自発的に読み返すのはつらい物語だと感じさせたものは何だったのか、あらためて考えてみたい。一番に挙げられる理由は、残酷ともいえる最期を迎えて世の中から消えていく王子とツバメの運命にある。「幸福な王子」なるものを期待し読んだつもりが、その当の王子の鉛の心臓は割れ、銅像は引き倒され、ツバメは凍死する。子どもには、登場人物の王子とツバメ、どちらも幸福でないまま終わる悲劇の話のように思えてもしかたがない。さらに、子ども時代に感じたことで覚えていることがある。南に飛んでいこうとする度に、王子の懇願の前に留まる、その繰り返しの度にさらに可哀想に思えていくツバメへの同情心である。明らかに、子ども時代の自分は、王子よりもツバメに自身を重ねていたのではないかと思う。王子が銅像であるがゆえに、命あるものとしてのツバメをより身近に感じ、それゆえ可哀想だと感じるということもあるだろう。王子の願いを聞いて飛んで回った小さなツバメの行為が、その身体的な条件のため、小さいだけが私達に与える特有の感情、いじらしさ、けなげさ、を引き起こしたとも言える。しかし、それ以上にツバメを可哀想に思わせたのは、自分の中に湧いてしまった王子へのほんのかすかな反感によるのではないかと思うのである。ツバメは南に行きたいと言っているのに、また行かなければならないのに、たたみかけるように王子が懇願して というような、ツバメの南の地への夢も越冬の必要性も理解しようとしないう王子の態度に、何か釈然としないような感情が確かに存在した。一度ほど南に行くように口にするだけで、ツバメの過酷な運命に対しては、最後まで王子は無邪気、悪くいえば無頓着で、滞在を延ばすツバメを待ち受ける運命にまで思いがまわらないかのようなのだ。王子は、人々を寒さや空腹から救いたいとしながら、それを助けたツバメの方はパンくずを街角で拾い翼をはばたかせて寒さをしのぎ、最後は死を迎えたのだというような、何か子

2) Wilde Oscar *The Happy Prince and Other Stories* 2003, Puffin. 本稿においては、邦題の『幸福の王子』を使用する。また、小説から原文を抜き出している場合は、(注)をつける代わりに、原文の箇所の後頁に頁を記す。原文の後につけてある邦訳は、筆者自身によるものである。

どもでさえも割り切れないような不公平感を覚えた。ところが、大人になってあらためて読んでみれば、王子やツバメの行為の意味することも、彼等の関係も、王子の言葉やツバメの選択さえ全て納得できるのである。それと同時に、王子とツバメの選んだ幸福なるものの質がわかって、この話自体が、王子の街が象徴する社会と王子やツバメという個人の幸福の関わりについて考えさせる優れた物語であることを素直に認めることもできる。

そうした社会の中での個人の幸福の質の変化と選択を、この王子とツバメの物語に沿って、考察してみたい。まず、生存中に世の中の苦しみや惨めさから隔離され幸福であった王子、美しい銅像であるがゆえに人々から幸福と思われている王子、その幸福は、街中の貧窮する虐げられた人々を見て「幸福」でなくなった王子の、その括弧つきの「幸福」とは明らかに違う。王子は、美しい銅像として街の人々に憧憬されている銅像である今だけでなく、街に苦しむ人々が存在していることを知らなかった時も、本当はこの「幸福」を持っていなかったのだと気づいたのである。そして、街の人々の苦しみを見て心を痛める今は、助けることもできない、立っていることしか出来ない銅像であるがゆえに、二重の意味で王子は「幸福」ではない。王子の「幸福」の欠如を少なくとも少しでも補うことが出来ることとすれば、人々の苦しみを知った今、自分に出来る行為をすることなのである。しかし、彼は動くことが出来ない。行為を全て封じられて立っている。

こうした二重に「幸福」から遠ざけられている王子が、たまたま一夜を過ごそうとしたツバメにお願いをする。そのツバメはといえば、遅ればせながら南のエジプトに飛んで行き仲間と幸福に過ごせることを夢見ているツバメなのである。王子は「幸福」ではない状態で、ツバメに会い、ツバメは幸福になれると思える南へ行くことを延ばし、王子の願い通り人々に宝石を届けていく。その過程で、幸福の質が変わっていったのは、ツバメも一緒である。南で得られる幸福は、ある時点からツバメの幸福ではなくなってしまふ。子ども時代には全く見えず、ある種の犠牲のような感覚を私に与えていた、このツバメの得た変化した括弧つきの「幸福」とは、王子に頼まれて貧窮する人々を助ける行為を手伝い、そうした行為によってのみ得ることのできる「幸福」である。物語でツバメが王子の頼む行為自体から「幸福」を感じていった過程は、物語でもはっきりと示されている。ツバメが初めて宝石を運んだ後で、寒いのに自分は暖かくなったと王子に語る箇所がある。王子が、その意味を、そしてこれこそが幸福の質の違いと言えるものに思われることを、ツバメに示唆した箇所である。

“Then the Swallow flew back to the Happy Prince, and told him what he had done. ‘It is curious,’ he remarked, ‘but I feel quite warm now, although it is so cold.’

‘That is because you have done a good action,’ said the Prince. And the little Swallow began to think, and then he fell asleep. Thinking always made him sleepy. (p. 7)

それからツバメは「幸福な王子」のもとに飛んで帰り、彼がしたことを話しました。「おかしいのですが。」と彼は言った。「私は今では本当に暖かく感じるのです。とても寒いのですけれどね。」「それは、おまえが善いことをしたからなんだよ。」と王子は言った。それで、小さなツバメは考え始めました。そしてじきに眠ってしまいました。考えることは、いつもツバメを眠くさせたのです。

その時のツバメは王子の言った意味を理解したわけではない。しかし、王子の願いの度に、幸福に過ごせる南の地を思いながらも、ツバメは留まる。留まることを選ぶツバメの「幸福」は、南で過ごせる幸福とはすでに質が違うものとなっていたことがわかるであろう。ツバメは、一度だけ、ツバメが元々は手に入れるつもりだった幸福を得、同時に、王子の行為を手伝うという「幸

福」も保持できる、現実的に両方が生かされるように思える解決策を示唆することがある。剣の宝石を母子に、片目の宝石を青年に届けた後の王子との会話である。

“Dear Prince, and next spring I will bring you back two beautiful jewels in place of those you have given away. The ruby shall be redder than a red rose, and the ruby shall be as blue as the great sea.” (p. 11)
 「王子様、来年の春、二つの美しい宝石が私がああなたの失った場所に持って戻ってきます。赤い薔薇よりも赤いルビーと、大海原を同じぐらい青いルビーをです。」

しかし、王子はそれには全く応答をすることなく、残った片目の宝石をマッチ売りの少女に持っていってくれと頼む。王子には、善い行為を必要とする少女だけが見えている。王子に何度も頼まれ、ついに宝石を持っていった後のツバメは、この時提案していた、南で冬を越すと同時に宝石を持ち帰ってくるという選択肢を捨て去っている。南に渡ることによって得られるだろう幸福を求めようとする意志は、ツバメから完全に消えたのである。

‘You are blind now,’ he said, ‘so I will stay with you always.’ (p. 12)
 「あなたは今や目がお見えになりません。」と彼は言った。「だから、私はこれからずっとあなたの側にいます。」

ツバメは、この日から、南の地へ飛んだ後に自分が持つことができるだろう幸福な日々を語って夢見ることにはしないで、王子の下で選択した「幸福」を生きる。それは、冬が彼の生命を奪い去るまでの短い日々、王子の傍らにとどまり、王子の目となり、王子の思いを届け実行する行為者としての「幸福」である。死後、天使達が地上で価値のある二つ 王子の魂とツバメの亡骸を持ち帰る。王子は、貧窮の人々に自らの体を犠牲にして与え続けた善い行為により、そして、ツバメは、その王子を手伝ったその善い行為によって、言い換えれば、社会の中で善い行為を為すという同一の「幸福」を選んだ理由で選ばれたのは確かなのである。

こうして社会の中で善い行為によって得られる「幸福」という観点でみれば、王子とツバメは同じ性質の幸福を手に入れたのだが、一方、その善い行為を起こさせ、かつ続けさせる理由という観点においては、王子とツバメの場合には異なる点がある。実は、その王子とツバメの違いを示す象徴的ともいえる箇所が物語に描かれているのだ。王子の眼が失われ、ツバメが同時に王子のもとに命のある限りは留まることを決意した後である。ツバメは、王子に、南の地の様々な不思議な話をする。それまで南のことを話す時は、いつも自分自身がそこでどのように過ごすかを想像したものだった。けれども、今度は、両目を失った王子を喜ばせてあげたいという一心から、不思議で信じ難い神秘的な南の地の出来事の話が語られるのである。ところが、王子はそのツバメの話の止めて、こう言う。

‘Dear little Swallow,’ said the Prince, ‘you tell me of marvelous things, but more marvelous than anything is the suffering of men and of women. There is no Mystery so great as Misery. Fly over my city, little Swallow, and tell me what you see there.’ (p. 12)
 「小さなツバメよ」と王子は言った。「不思議なお話をしてくれるんだね。だけど、何よりも不思議なことは、人々の苦痛そのものなんだよ。不幸よりも大きな不思議はないんだよ。街を飛んでみてくれ。そして、そこで見るものを私に教えておくれ。」

ツバメは飛び立ち、力なく通りを眺めている飢えた子どもの青白い顔を見る。橋の下でお互いを

暖めるために身を寄せ合っている二人の幼い少年のつぶやきを聞く。「お腹が空いたね。」そして、そのつかの間の休息も許されず、大人に追い立てられていく。「こんなところで横になるな。」彼等は、雨の中に出ていくしかない。聞くまでもないのだ。王子がツバメから聞く街は、実際は、王子がそうではないかと怖れている、苦悩する人々であふれた街なのである。それゆえ体の金箔をはがして届けてもらうことを王子は頼む。金箔が届いた子達には顔色がもどり、通りで遊び笑うことが出来るようになる。一方、金箔がはげて王子はみすぼらしくなっていく。それでも全ての困窮の人を満たしたのだと物語に書いてあるわけではない。王子は、貧しい恵まれない大勢の人々を見つければ見つけるほど、ツバメに頼み続けるしかない。縫い子、若き作家、小さなマッチ売りの少女、王子の金箔によって食べるものを得ていった貧窮した人々の喜びは、一時的にそこに生み出されているようなのだが、そうした人々が他にも居る限り、王子に永遠の「幸福」はもたらせられないのである。こうして王子に二重に「幸福」を妨げたものは、一つは王子の足となって飛んで届けてくれたツバメによって解消されたが、もう一つは最後まで残ったままだったのである。一番の変化は、結局、本格的冬の到来でツバメが凍りつく厳寒の街となることだけであり、王子の自分の身を削る行為に終わりがくるのは、王子達の行為が街中の人々の苦悩を取り去り幸福で満たしたからではなく、行為を手伝うツバメが死を迎えるからなのである。王子の行為は、人々を助けるために始まり、助けることに意味があったのだから、今や自分の行為を続けさせてくれたツバメを失い、同時に自分の助けが人々には二度と届かないことを知った時、そのための「幸福」の欠如の中、鉛の心臓も割れていく。

一方、行為を起こした理由は、ツバメにとっては、何よりもまず王子への愛である。体が暖かくなるというように善い行動の与える精神の高揚をツバメも感じたし、王子の行為の素晴らしいこともわかっていたが、何よりも、ツバメは、その善い行為を為すことを求めてやまない王子そのものを愛した。ツバメが死を覚悟して王子に別れを告げ、手のひらへキスをする事への許しを求めた時、王子はツバメへの感謝をこめて、こう言う。

"I am glad that you are going to Egypt at last, little Swallow,'said the Prince, 'you have stayed too long here but you must kiss me on the lips, for I love you.' (p. 14)

「おまえがついにエジプトに行くのでよかった。小さなツバメ。」と王子は言った。「ここに長くいすぎたからね。私の唇にキスをしてくれ。おまえを愛しているから。」

そして、ツバメは王子の唇にキスをする。そのツバメはといえば、社会の貧窮する人々を身を削ってまで救うという善い行為を選ぶ美しき魂を持つ王子だけでなく、こうしてツバメにもたらされる不可避ともいえる死には無知で疎いとも言える王子を、自分のこの死を課す選択の理由となるほどに愛したのである。言い換えれば、最後までツバメの運命には気づけないで、困りきった街の貧しき人々を見ている、そうした王子であるがゆえに、王子を愛したのである。王子をその本質のまま愛したから、ツバメは王子の善い行為を、自分の死をも賭けて助けるしかなかったともいえる。結局、このツバメの王子に向ける愛だけは子ども心にも明瞭であったため、ツバメが愛する者に応えるために犠牲になったように思えて可哀想に感じた理由ともなったのである。しかし、大人になって深く理解すれば、このために、むしろツバメは幸福であったのだと感じさせる理由にもなっているのだ。ツバメは、王子を完全に理解して愛するような幸福と「幸福」の両方を持っていたのだから。ただ、ツバメも幸福に死んだわけではないのは明らかである。王子の善い行為を助ける、それがツバメの行為の始まりの理由でもあり、続ける理由であり続けたのだから。

ら、街にはまだ多くの貧窮の人々がいるのに行為を為せないままの王子を残していくことには、ツバメの思いは残っていたはずである。

2. 善い人、善い行為を助ける者、の「幸福」の変化と質

前節で説明してきた『幸福の王子』におけるような、社会の中での個人の幸福の質の変化と選択を、ここでは、別例を挙げて考えてみたい。そして2つの例における共通項を見ることで、さらに考察を深めていきたい。

Das Leben der Andere (『善き人のソナタ』)³⁾ は2007年にアカデミー外国語映画賞をはじめ、数多くの賞を獲得した映画である。1984年、東ドイツの社会主義政権下で、徹底した監視システムを持っていた国家保安省、シュタージの行為が、念入りな取材を基に描かれ、登場する虚構上の人々も、そうした社会では存在していたかもしれないような者達である。考察に必要なストーリーをまず簡単にまとめてみる。自由主義への傾倒のため監視下におかれる才能ある作家と、彼の監視を受け持って、盗聴を毎日続けるシュタージ局員の大尉。作家を盗聴する内に、大尉は次第に、作家の危ない発言や行為を本部からは隠すようになる。大尉自身が、作家に共鳴して、個人の自然な表現の発露を止める社会に問題がある、と考え始めるわけでもなく、社会制度自体に批判的になったり、反政府的になったりするわけでもない。ただ、周りの人々に人間味あふれる感情を示すこと自体は止めない、反体制的として押しつぶされていく友人には誠実である、プレッシャーの中で自分の生き方まで見失っていく恋人を支える、というように、体制には影響されずに、自分が信じている人間性を示し続けている作家の生き方に、盗聴をしながらも心が動かされていくのである。やがて作家は、自由な生き方を奪われ抑圧に苦しめられる友人や恋人のようなその他大勢の人々のために、危険を犯して、さらに積極的な反政府行動、西側で発表する東ドイツの体制批判の原稿の発表、を計画し始める。作家の恋人は、作家を愛しながらも、社会主義政権の下で自分の才能が埋没することを恐れ不安定な行動を取り続け、最後には、女優であることを守るため、偶然知った作家の反政府行為をシュタージに密告する。密告を知った大尉は、原稿をタイプした証拠となるタイプライターを、急襲したシュタージ局員達の先回りをして隠し場所から奪い隠す。証拠は消え、作家は迫害を受けない。ただ作家は、その際に事故死した恋人が自分を裏切ったことは知らず、彼女が自分を守って犠牲になったと信じこむ。一方、当然のごとく、大尉は上官に疑われてシュタージでの自分の地位を失い地下室での閑職へ追いやられる。そして、4年7ヶ月後、ドイツの壁は壊され、自由社会が実現する。才能がありながらも、恋人への贖罪の意識を抱えたまま書くことができないでいる作家は、自分がかつて盗聴されていたことを偶然知る。しかし、それであれば、反政府・反社会主義的発言や国家への反逆行為をしていた自分が逮捕されなかった理由がわからない。シュタージの資料室に向かった彼は、自分の膨大な盗聴記録書の中で、自分に不利となる会話や事実の部分だけは改竄されていることを知る。恋人の裏切りも分かる。タイプライターを隠すことで、自分の危機を防いでくれた人物は、自分の盗聴を担当していたシュタージ局員であったことを知り、記された暗号名をもとに、大尉までたどりつく。作家が見たのは、配達夫として、カートをひいて薄汚い街角のビルの一軒一軒に郵便物を入れて

3) 本稿においては、邦題を使用する。また、「作家」「大尉」「恋人」「友人」「上官」という一貫した名で同一人物を指すものとする。

歩く男だった。車をおりて彼のもとに向かおうとして、思いとどまる。2年後、大尉が、相変わらず配達して回っている街角の本屋に、作家の話題の新作がずらっと並んでいる。本屋に入り手に取った本の題名は『善き人のためのソナタ』。本の献辞は、「HGW に捧ぐ」とあった。これは大尉のシュータージ時代の暗号名である。本は、まさに大尉に捧げられたのである。

前項での『幸福の王子』との共通点をあげていこう。まず幸福の質の変化である。大尉は、盗聴をしながら、善い行為をして生きる作家に心を動かされ、一度も個人的な接触はなかったにもかかわらず彼を守って、その地位を失った。盗聴を始める前の彼は、シュータージという役割に極めて忠実に生きて、その仕事を上手にこなしていくことに幸福を感じていた。地位を失うことで、彼はその幸福は失ったことになる。しかし、彼の幸福は、彼がはっきり意識をしない中で、その質を変えていく。彼は、善い行為者である作家の生き方とその行為者である善き人を守ろうとし始めることによって、自分の身の危険さえ犯していく。王子が作家であり、ツバメは大尉である。ツバメと同じように大尉には、作家への人間的な愛が育つ。ツバメも大尉も、自発的に自分達が守る相手を選んだのであるという点では一緒なのである。そして、その守る相手は、社会で苦悩する人々のために善い行為をしようとする善き人なのである。善き人を助ける行為をしたために、彼等もまた「幸福」なのである。

幸福の質が変化する過程では、善き人を助ける側には、今まで知っていた幸福との間の選択において、迷いが存在することも共通である。ツバメが最初は約束を果たせば南に今度は旅立つと王子に示唆し続け、途中でも、一度は、まず南に渡り、翌春に王子のための宝石を持ち帰るように提案したように、大尉も、自分がそれまで信じていた幸福——シュータージ局員として優秀な仕事をする——に戻ろうとする瞬間が何度かある。作家の秘密の計画を聞いて一度はシュータージへ知らせるため受話器を取った時、自分が長く人生を捧げてきたシュータージへの罵倒の言葉を盗聴し、思わず怒りがこみ上げて本当の会話を盗聴記録に記した時——これらが、大尉がかつての幸福に固執しようとする瞬間であった。しかし、彼は受話器を置き「今度だけは見逃す」と独り言を言って沈黙し、上官が「この作家のようなタイプは、自分達が上手く扱えば、二度と書けなくなるのだ。」と嘯くのを聞きながら、自分の手に記録を握り締めたまま部屋から出る。作家に書く行為を止めさせることは大尉にはできなかった。迷いながらも、変化した「幸福」の質の方を選択していく大尉は、南へ飛び立たなかったツバメと同じなのである。

三つ目の共通性は、善き人の善き行為を助けた者は、その助けた行為によって善き人の「幸福」を実現可能にしたということである。ツバメが王子の思いを実行する足となって王子の「幸福」を、大尉は、盗聴記録を改竄し、シュータージに迫害をさせずに作家に行動させ続けることで、作家の「幸福」を可能にした。後者では、そうした過程が2回に分けて示される。最初は、東ベルリンで、盗聴記録を改竄して彼を迫害から密かに救っていく時、もう一つは後に作家がその行為を知った時、である。恋人の不慮の死を自らが招いたと解釈したがゆえ、自分の行為が本来その行為の結果を受けてほしいと願った人を犠牲にしたという意味で、善い人の側の衝撃は大きい。それゆえ作家は書くことができない。しかし真実を知ってみれば、そこに存在したのは、自らの選択で自分に手を差し伸べてくれた人間の意志だった。破滅の際までいった自分は、盗聴していたシュータージ局員の積極的な行為によってこそ助けられたのだ。そうした自分へ向けられた善き行為を助ける者の意志と行為を知ることで、善き行為をする手段であった書くことへの気力と希望を再び取り戻す。作家も「幸福」を取り戻したのである。言い換えれば、大尉の行為が、一回はその過程で、二回目はその過程が作家に知られることで、作家を「幸福」にしたのである。

四つ目に、見返りへの期待の無さが共通している。身を削って善き行為をする王子や危険を犯す作家は、自分の行為に対して彼等が助けようとした人々から何ら見返りを期待していない。またツバメや大尉も、また自分の命の危険を賭しているのだが、そうした自分達が助けている善き人からの見返りを求めている。つまり、善き行為をする善き人が、その行為によって助けた人々からの感謝を期待していないように、善き人の行為を助ける者達も、その善き人からの感謝を期待することはなかったのである。だからツバメは、南行きを完全にあきらめたことを王子に最後まで言うこともなく、大尉は、作家に自分の行為を説明しようとはしない。二つの物語の共通ともいえる、善き人から助けた者に向けられた最後の感謝に私達が強く心を打たれるのは、何よりもそれを受けた者がその感謝を得るために一度も行動していなかったからである。王子が優しい言葉とともにツバメに許した唇へのキス、作家が大尉へ捧げた本は、それらを求めずに行爲した者に為されたゆえに胸を打つのである。

最後に挙げるべき共通性は、善き人とその行為を助けた者のそれぞれの行為が持つ意味の違いである。これが、すでに上に述べたような、ツバメや大尉にだけ見られる幸福の選択における迷いの存在を説明するのでもある。王子と大尉は、「社会の不特定多数の苦しむ人々」のためにする善き行為であり、ツバメと大尉は、そうした「善き行為者である個人」を助けることを行為の理由としていたことである。王子は、助けを必要としている街の人々へ善い行為をするため身を削る。作家は、抑圧される人々のためにすべきこととして危険を犯して西側に原稿をおくる。ツバメは、その王子を助け、善い行為を実行する。大尉は、作家の盗聴記録をかえ、最後は証拠品を隠すことで作家の行為を続けさせる。言い換えれば、王子と作家のその行為の理由は、善い行為のその本質のために存在する。ツバメと大尉は、善き行為をしようとする善き人である王子と作家を愛し、助けることに、彼等の行為の一番の意味がある。もちろん、善き人の善き行為を助けようとする時点で、彼等は善き人の善き行為の「善さ」を十分理解したのであるが、善き行為自体からくる幸福はあくまでも二義的な理由であり、彼等の行為の一義的理由ではない。こうした違いは、最後まで存在する。すでに一節でも述べたように、ツバメが南の話で王子を楽しませようとした時、それを遮って最後まで助けを待つ貧窮する人々のことを語ることを求めた王子と、そう願う王子のために、話を止めて街へ飛び立ったツバメとの違いであり、社会体制が抑圧する人々の苦悩を救うために闘おうとする作家と、作家と作家の行為が続くことを助けはしたが、自らがそうした信念を持って体制に抵抗することは一度もなく、地位を失った後も、何年も淡々とシュータージの地下室での仕事をし続け生きた大尉のようにである。善き人の行為を助けて、行為の与える幸福を善き人と共有したが、ツバメや大尉の行為は、まず善い人を愛し助けることで始まり、そして最後までそれが彼等には一番重要な意味を持っていたのである。そして、この愛する個人のために為すことで得られる幸福とは、私達も理解できるし、私達も得ることを願う幸福なのである。

3. 「幸福」とは——「よく・生きる」

前節で最後に挙げた共通項のように、最後まで善き人と善き人の善き行為を助けた者には、その行為が持つ意味の違いが存在する。そうとすれば、善き人の「幸福」、善き人を助けた人々の「幸福」は同じ括弧つきでも、最終的には違うものと考えべきなのだろうか。それとも、王子、ツバメ、作家、大尉の、社会における個人の選択する「幸福」の質に共通項が見えてくるのだら

うか。これが次の問いとなっていく。この節では、その点について考察することで、これまで考察してきた「幸福」の性質そのものの定義を試みたい。実際に、前節で記した共通点の中に、王子、ツバメ、作家、大尉全てに共通する項目が2つある。「善き行為」と「行為の理由であった者からの見返りを期待しないで為される行為」である。つまり、四者の「幸福」は共通項を見出すことは可能なのである。そして、共通項に見えてくるのが、有名なプラトンの語る「幸福」である。

「よく生きる（幸福）」というのは、従って「私の生」というものがそれ自体としてすでに成立し、それとは別の「よさ」が外側から付加されるという仕方であるのではない⁴⁾。

それは、丁度机が机としての機能を果たす上で、「よい机」であり、付属品が「机のよさを決める」というのでないのと同じようなことだと、彼は続ける。

同様に「よさ」と絶縁された人間の生があるとしても、（中略）究極的には脳死体のような、「誰の」とも言えぬ所有者不明の不気味な生命現象の事実だけがあるにすぎない。人間にとって「よく・生きる」という両項は分離することができないのであり、私が少なくとも何か人間として（人間らしく）生きているということのうちには、すでにこの「よさ」への与り（と同時にそこからの欠落）が認められなければならないのである⁵⁾。

この「よく・生きる」という幸福において、王子、ツバメ、作家、大尉等の幸福は実は異なっておらず、共通した幸福と言えるのである。貧窮の人々を助けたい王子はツバメを得て行為を為し「よく・生きる」ことが可能となり、一方、ツバメは王子の善い行為を助け、「よく・生きる」、そして、体制に対して人間らしく生き、その体制の非人間性を告発しようとする作家は大尉の密かな助けもあり、「よく・生きる」ことを続け、大尉は作家の行為の継続を密かに助けることで、「よく・生きる」ことを始める。だからこそ、王子は人々に善行を理解されて感謝されたいわけではなく、ツバメは王子から感謝されたいわけではないのである。「感謝される」ということは、まさに、「『よさ』が外側から付加されるという仕方」に過ぎないからだ。危険を犯した行為に対して、作家が助けようとした人々から感謝されたいわけでもなく、それを助けた行為を大尉が作家に知らしめたいわけでもない。「よく・生きる」＝「幸福」をすでに得ている王子も、ツバメも、作家も、大尉も、彼等のその幸福なるものの性質ゆえに、賞賛も感謝も必要としていないのだ。もちろんあれば、それはそれで素晴らしいことだろう。でもそれは、彼等の「よく・生きる」行為の効果を確認することが出来るからに過ぎない。彼等の「幸福」自体は、すでに、「自分の生」を「よく・生きる」という点で、すでに成立していたといえるのである。

1・2節において、社会の苦しむ他者のために行為を為す、善い人々とその人を愛して行為を助ける人々の「幸福」を物語や映画に例をとって見てきたが、こうして善い人と助ける人々の「幸福」の性質の共通性が明確になってくると、あらためて、彼等の場合、まさにプラトンの言うような「自分の幸福は他者に依存せず、他者の幸福には貢献する（あるいは、それを妨害しない）ような生き方」⁶⁾が存在するのが分かる。善い行為すなわち正義を為しても、その報酬を考慮に

4) 荻野弘之 「『正義と幸福』の視点」『正義と幸福』哲学会（編）有斐閣、1994、p33.

5) 荻野、p. 33.

6) 天野正幸 『正義と幸福 プラトンの倫理思想』東京大学出版、2006、p. 38.

入れることはない。その行為は、身につけた正義の徳から為されるのであり、そこから「善き人は幸福である」とプラトンは導きだしている⁷⁾、そんな幸福である。「幸福になるために、自力でできることあるいは為すべきこと⁸⁾」をする。王子が、貧窮する人々を銅像であるがゆえに助けることができなかつた時に、王子は二重の苦悩で幸福ではないと考えられると一節に記した。貧窮した人々がいることを知る善い人としての苦悩、そして、善い行為を果たすことのできない苦悩。ツバメは、そうした王子の後者を少なくとも取り去ってやったのである。王子の善い行為はツバメという媒介を得て為され始めた。善い行為を為す手段をずっと奪われていた善き人である王子を、自らの行為によって「幸福」にしたのはツバメだったのであり、それはツバメの「幸福」でもあった。結局「幸福の王子」は、ツバメと出会えた間「幸福」だったのである。『「幸福」の王子』と書くことができるような、である。

しかし、その事実をもってしても、この王子のごとくあれ、作家のようにしよう、とは簡単に言えないであろうことを私達は知っている。美しい体を失っていく王子や、摘発の危険を犯して書き続ける作家は、すでに普通の人々ではなく、ヒーロー的である。では、ツバメや大尉の選択はどうであろう。悲劇的に思われる最期、持っていたものを全て失う危険、そうしたことを分かっているとしても、私達に可能な選択なのだろうか。実際、プラトニックな「善き人」であることが、原則としての人間の幸福であることは、今まで考察した限りでは、ほぼ間違いない一方、国家がこうした「善き人」を完全に拒否し、「善き行為」でさえ抑圧する形で存在する時には、普通の人々である私達は、どのように、社会正義と自分の幸福であることを関わらせていくのだろうか。一節で書いたように、子ども時代に読んだ時にツバメの方に自分を重ねて、なぜか哀れに感じたのも、結局は、自分の体を差し出していく王子は、普通の人である自分とは重なることを想像できないほど「善き人」であり、その王子を愛してしまい、南に行つて得る幸福を何度も思いながらも、善き行為をしていくツバメの方が、まだはるかに普通の人である自分のレベルに近かつたからなのである。そして、悲しいかな、大人である今でさえ、そのツバメが可哀想に思える気持ちをまだかすかに持つてしまうのは、自分が、善き人である王子を愛することもあるだろうし、その善き行為を助けるかもしれないだろうし、ツバメになることの「幸福」を取ることもあるのだろうか、という程には自分にも善き行為と行為者への憧憬があることがわかり、それでもなおかつ、そうして「幸福」を手に入れても、つらく思う瞬間があるのかもしれない、と怖れるほどには弱さも持ち合わせている、まさに普通の人だからなのである。結局、普通の人である社会の大多数の者は、王子や作家の選択はもちろんのこと、ツバメや大尉の選択でさえも自分が選ぶことを迷いなく選べるか自信がないことを認めなければならない。ツバメは「よく・生きる」ためには、死に向かう自分の生を自ら選ぶしかなく、大尉は社会的に抹殺される。普通の人々に十分な恐怖を与える結末であろう。王子や作家の「幸福」にいたっては、なおさら厳しいことになる。王子の失った両眼と金箔の全てはげた体、タイプライターを床下に隠した家にシュタージの急襲を受けた時の作家の破滅と紙一重の場での緊張　普通の人々が耐えられるのだろうか、と。だからといって、そう居直つて良いのかといえは、それもまた否であることは、分かるほどに普通の人なのに、である。

ここで考えてしまうのは「ソクラテスの幸福」である。「ソクラテスの幸福」ほど、現在にい

7) 天野, p. 212.

8) 天野, p. 212.

たるまで学者に論じてこられた「幸福」もあまりないだろう。このソクラテスの場合、幸福に生きることと正義しく生きることが一致すると一般にはいわれている⁹⁾。しかし、これはソクラテスだけの特殊なケースではなく、ソクラテス自身は、この幸福と正義の一致はすべての人間の生について成立すると見ていた¹⁰⁾。つまり、私達も、ソクラテスの場合と何ら異なることなく、「正義しい行為によってよりよいものになり、不正な行為によって滅びる、あのもの¹¹⁾」を持っており、それが失われた時には、私達の生も生きる甲斐を失ってしまう。その「あのもの」については、「われわれの一部分であって、正義の徳と不正がそれについて言われる、そのもの¹²⁾」であり、明言されていないとしても、少なくとも、「われわれの『生き方』が含まれ、それが亡びるとともにわれわれの『よく生きる』ことが亡びる」ことは確実なのだと言明される¹³⁾。

人間にとっては生きるとは、ただ息をしているということではない。まして、その息をしている時間を延長することでもない。むしろ、われわれに許された時間の中で自分の生を生きることだろう。それは言い換えれば、自分で自分の行為を選び取ることであり、それによってまた自分の生き方（あるいは法、あるいは言論）を作り出してゆくことであると思われる¹⁴⁾。

社会に問題があった時、その社会の枠外に出て自分が存在しているかのように想定し、その問題に対して目を閉じ耳を塞いで生きること、そもそも幸福であること自体が可能ではないということである。ソクラテスは、かつて、「善き人」であるために、国家に強制された死を選んだ。それは「ソクラテスの決断」だ、と言いつけることはやさしい。しかし、社会と自分の幸福との関係がどうあるのかを、私達もきちんと一度は覚悟して考えておくべきなのである。社会に生きようとする限りはである。しかも、実は、そういう努力をしない限り、あれほど私達の自己実現には不可欠な「幸福」になることさえ本当には可能でないとと言えるのだ。「正義しい行為によってよりよいものになり、不正な行為によって滅びる、あのもの」を失って良し、と居直るモノにならない限りはである。しかし、覚悟とは大変なことである。善き人である覚悟だけではない。善い人を認め愛し助ける覚悟でさえた。ツバメは死を賭して留まったし、大尉は地位をかけた。こうした個人の覚悟が困難であることを思う時、まず社会がそうした大変な覚悟を迫らない社会、そこに存在する大多数の個人が幸福であるような、社会全体として見た時の幸福感の存在、すなわち、「幸福なる社会」が実現していればよいのではないかと考えてしまうのは自然なことであろう。

4. 「幸福なる社会」から程遠い社会

「幸福なる社会」の実現を試みるのが、個人に選択を迫るより容易に見えるというのであれば、この「幸福なる社会」がいかなる特徴を持つ社会なのかを考え、その上で個人の幸福の選択とどう関わりあっていくのかを整理してみる必要がある。この節では、「幸福なる社会」の実現と個人の選択の関わりを考えていくのにあたって、「幸福なる社会」から遠い社会と感ぜられる社会、

9) 田中享英 「ソクラテスの正義とわれわれの幸福」『正義と幸福』哲学会（編）有斐閣、1994、p. 13.

10) 田中、p. 13.

11) 田中、p. 17.

12) 田中、p. 17.

13) 田中、p. 17.

14) 田中、pp. 19-20

とは、一体どんな特徴を持つのかを、今まで使用した2つの物語から、まず考えてみたい。善い行為をする者とその行為をする人を愛した者のした行為、そして彼等の得た「幸福」が描かれている点では共通でも、『幸福の王子』と『善き人のためのソナタ』には、正反対ともいえる制度からなる社会が存在する。王子の街は、富める者はあくまで栄え、貧しき者は命をつなぐ術さえないまま置かれる、物乞いがあふれる自由資本主義的な街、一方、作家の住む東ベルリンは、最低必要な食住は人々に保証され、通りに物乞いは存在しない社会主義の街である。王子が見渡す、荒涼とした虚構の街（実際には、作者ワイルド自身が見る1880年代ロンドンの街が反映されている）と、シュタージの盗聴網が隅々まではりめぐらされた、事実に基づいて描かれたという東ベルリン、食べるのにも事欠く人々の苦惱で満ちているのに、市長や役人は自分のことだけを考え、銅像が今度は何になるのかしか気に留めていない、そんな王子の街、自由であるべき才能の表出や、素直な感情を吐露すべき友情や恋愛にさえ統制がかかる中で人々は苦惱し、役人は盗聴して社会の異なる者をあぶりだすことにだけ力を注いでいる、東ベルリンの街 制度としての共通項はない社会のようで、その性質において、一つ共通するものがある。そこは、善き人も善き行為も、善き人を愛し、その行為を助けようとする者達も存在はするのだけれど、そうした者達をすべて包み込んでいる社会は、多くの人々が苦惱する、まさに大多数の幸福でない人間が存在する荒涼とした社会なのである。そもそも大多数の人々の幸福が満ちていない、つまり大多数の不幸が明らかに存在する社会は、善き人に善き行為をさせて、彼等が命を賭けなければいけないような社会となり、幸福への選択において、善き人に厳しい運命を課し続けることになる、そんな社会と断言していいのであろう。

ここでさらに三例目を加えて考察を続けてみたい。2006年のカンヌ国際映画祭でパルムドール受賞の映画 *The Wind that Shakes the Barley* (『麦畑の穂をゆらす風』)¹⁵⁾ からである。アイルランドを舞台に、兄弟の運命が、歴史の中で実在していたかもしれないような人々の物語として描かれる。1920年、イギリス軍に迫害されるアイルランド人の現状を変える手段としてアイルランド独立のために戦う兄は、ロンドンで医者になるために出発予定だった弟が自分達の闘争への参加した時、大喜びで歓迎する。しかし、アイルランド政府とイギリスとの停戦後に、アイルランドのためになると兄は信じて政府側に入り、弟は闘争を続けていく側につく。迫害されるアイルランド人のために思って闘っていたはずの兄弟は、そのまま同じ目的のもとに闘っているという意識でいながら、敵対した関係となる。二人が再会した時、運命の歯車は過酷な条件を二人に課していた。政府軍に囚われ、同志の居場所を黙秘したため銃殺の危険が迫った弟と、その銃殺命令を下す立場の軍人である兄。兄は弟を説得する。「おまえに幸福になってほしいのだ。」弟を愛する兄は本当にそうあってほしいと思い、この幸福なるものの条件を口にする。「愛する人の待つ家にもどって、おまえには幸福になってほしい」のだと。そのために必要なのは、仲間の居場所を言うことだけなのだ。しかし、弟はその選択を受け入れない。それはすでに弟には選択することが不可能な幸福なのである。「幸福になってほしいのだ」と言われても、弟には、兄の示唆する条件で得られる幸福は、もはや幸福ではなくなっているのだ。この停戦によって、アイルランドの底辺の貧窮した人々の苦惱は解決されていないことが、弟には見えてしまっている。栄養失調の子どもや不当な扱いをされる大多数の人々の苦惱が見えているのに、前より今はよい状況

15) 本稿においては、邦題を使用する。また、「兄」「弟」「恋人」というように一貫した名で同一人物を指すものとする。

にはなっているのだから、まずは満足すべきだとする兄のように、自分だけが愛する人の待つ家に戻り幸福になることは、弟にはもうできない。『幸福の王子』の王子のように、今の弟の眼には、人々の惨めさが見える。『幸福の王子』の中で、ツバメが、自分が南に渡り、春に王子のために眼となるルビーを持ち帰るといふ、現実的に2種類の幸福が成立することを示唆した箇所を彷彿させるシーンである。王子が、そのツバメの提案に全くふれず、すぐに貧窮の人のための行為を頼んだ時と同じように、弟も、ツバメと同じような提案、つまり兄の提案は受け入れられないのである。

二つの物語が異なっていくのは、ここからである。ツバメは、二度とその提案に触れることなく、王子のもとに留まる。しかし、この映画での兄はツバメにはなれなかった。弟は兄のいう幸福の状態を自分の幸福とはできないし、兄はそうした弟と弟の変化してしまった幸福を理解できない。理解できないのであるから、当然のことながら、兄の方には弟について行く選択肢は選べない。説得に失敗し、残された手段はなく（と兄は思い）、愛する弟の処刑を自ら下し、涙し、その死を見届けることになる。弟を家で待っていたのは、かつては兄弟の同士であり、弟の安全を祈り、同時に彼の行為は応援し続けていた恋人である。弟の最期を伝えた兄に、彼女は、「もうあなたの顔を見たくない」と叫び、彼は黙って立ち去る。この話の皮肉さは、兄が弟を肉親として元々強く愛していることにある。ツバメも大尉も、善き人で善き行為をする王子や作家を知り、そして愛し、善き行為を助け、その自ら選んだ行為によって「幸福」を得た。兄は、愛しているから、弟を必死で生へ向かうように説得する。その兄の愛は、「善き行為」を選ぶ「善き人」へ向けた愛ではないのである。弟をツバメのごとく愛した恋人から兄に向けられた永遠の拒絶は、彼女の怒りなのである。もし、私が、彼女に代わって、その怒りの内容を兄に説明してくれと言われるなら、こう答えることになるだろう。かつて弟をそこに導くほどに信じた、あのアイルランドの人々を解放するための闘争においても、あなたは実は「善き人」ではなかったのですね、（一夜の宿を取ったツバメや、盗聴機をただ耳にあてただけの大尉にも出来たというのに）「善き人」をその本質のために愛して助ける者にさえなれなかったのですね、そして、今、弟だから愛しているという理由で喪失の悲しみを私と共有しようとしているのですね」と。『幸福の王子』の原作に、“The poor little Swallow grew colder and colder, but he would not leave the Prince, he loved him too well.” (p. 13) 「小さなツバメはますます冷たくなっていった。しかし、ツバメは王子をあまりにもよく愛したゆえに、立ち去ろうとはしなかった」とある。「善き人」である王子の本質を分かったツバメは、王子を「よく愛する」、そんな愛を示し、それは兄には結局持つことができなかった愛の類だったのである。自然に元々存在した肉親の愛が試され、元々の肉親関係さえ翻弄され否定されていくような社会は、やはり「幸福なる社会」から程遠いのだとも言えよう。しかし、ここで一番強調されるべきなのは、「幸福なる社会」の実現に必要なのは、最初から前提として存在するような愛を持ち合う者達ではなく、「善き人」をその本質によって愛し、「善き行為」を助け、その過程で「よく・生きる」ような、人間としての核を生きることで「幸福」を手にいれていく者達なのだという事実なのである。大勢の貧窮する人々の最低限とも言える生活を保障できない時、国家が自由な人々の感情と自然な感情の発露としての行為を制限する時、貧窮する人々の切捨てのもとに上辺の幸福さだけが見事に確保される時、善き行為をしようとする善き人々の苦しみがいつも存在する。そして、自らの身を削っていった王子のように、破滅の際までいった作家のように、銃殺のもとに倒れた弟のように、善き人々の最期は悲劇的なものとなる。彼等を助ける者もまた、王子の足元で死んでいったツバメのように、来る日も来る日も肩

を丸めてビラを配布し一生を終えるだろう大尉のように、弟の行為を信じ応援しながらも永遠に彼を失った女性のように、何らかの代償を伴う悲哀に満ちている。結局、「善き人」と、善き人を「よく」愛し助けようとする人々の両方に、多大な試練と悲劇性を与えるような社会が、社会の大勢の個々人の幸福を一番妨げるような、「幸福なる社会」から程遠い社会、と言っているのだろう。

5. 「幸福なる社会」から程遠い社会、の人々

「幸福なる社会」から程遠い社会の特徴を、今度は、善き人々が見過ごすことができず手を差し伸べ助けようとする人々の共通性から考えてみたい。今まで取り上げた例では、彼等にどんな共通性が見られるのだろうか。『幸福の王子』に戻ってみよう。王子に見えるのは、病気の子の看病もできず、与える食べ物もないまま宮殿の女官の贅沢な服を縫い続ける母であり、食べる物もなく寒い部屋で書く気力を失っていく貧しい作家であり、お金も得ずに帰ることで父親に殴られることを恐れ泣いているマッチ売りの幼い少女である。母親が刺繍している服を今か今かと待っている女官は、真実を知ることもなく、また知る気もなく「縫い子が怠け者だから」と罵る。作家は才能にあふれるのに機会とは与えられない、少女は稼ぎがなければ殴るような父親のいる家しか帰るところがない。全てが不条理に幸福となることを妨げられている人々の例である。多くの、社会の底辺で無力なまま貧窮し生きる人々の選択肢の無さは、彼等が死に至るまでそうなのだ。そうした人々の多い社会ほど、幸福なる社会からほど遠い、不幸な社会なのだ。考えてみれば、王子の与え続けた宝石も金箔も街全体を幸福に見える社会にしたわけではない。何しろ、王子の金箔を届け続けて、配達が不要になったがゆえの行為の終わりではなく、ツバメの死で王子たちの善い行為も終わりになっただけであるから。貧窮する人々の数はあまりにも多すぎたのだ。そして、王子の銅像が倒される時の、王子に向けた人々の残酷な言葉に象徴されるように、王子とツバメのそうした行為後も、街は以前と同じように荒涼としている。『善き人のソナタ』ではどうだろう。作家の、自殺をした友人は、才能と表現の自由を完全に阻まれ、自分が生かされる場所さえも奪われ、生きる意味を失っていく、恋人は、自分の才能を潰される恐怖から、本来の自然な感情を曲げて行動し、自分を見失って薬に頼り、最後は自殺に近い形で命を失う。あるべき生き方や考え方は唯一一つであり、それに疑問を感じれば危険であるとされてしまうような、そんな2項対立で人々が分別され、一度「危険」と看做されれば迫害されるような社会では、人々は選択肢を失い失望の中死ぬしかない。彼等の死は実は彼等が本当の意味で選んだ死ではないのである。選択肢が与えられない中での、強制された死なのである。

『善き人のソナタ』において、作家が「東ドイツでの自殺者の数」を西側に発信しようとするシーンがある。ある時期から、東ドイツは自殺者の数の公表をやめ、そのために、ハンガリーの自殺者が一番多くなる。本当は東ドイツの自殺者の数が一番多い。「なぜだ」と作家達は語り続ける。「希望の死」なのだ。彼等は死ぬことによってしか実現しない幸福を希望して死んでしまうのだと。『麦畑の穂をゆらす風』で、弟にだけ最期まで見えたのは、一見平和になったような村で、栄養失調のため衰弱した男の子、言うべきことを抑圧される人々、他に選択肢が与えられないまま、ただただ続けられていくだけの生だった。結局、自分の幸福の実現を不条理に妨げられている人々が無数に現れてくるように見える社会、それこそが、「幸福なる社会」ではない社会なのである。「幸福なる社会」の実現に真摯に努めない国家には、善き人の生も善き行為も

困難な中で為され、不条理に幸福を妨げられた人々の数の多さに、いつしか彼等は朽ち果てていくしかない。しかし、少なくとも善き人々には「幸福」の選択肢はある。彼等は、善い行為をすることにおいてだけは「よく・生きる」、すなわち「幸福」であった。しかし、不条理に「幸福」を妨げられた人々は、丁度、マッチ売りの少女のように、全ての仕事を奪われた作家の友達のように、アイルランド人であることを理由に殺された青年のように、栄養失調となった男の子のように、選択肢さえも存在しないのだ。それを防ぐ手段もなく、何よりも、その不当さに気づく手段を奪われ、暴力を受け入れる。「よく・生きる」つまり「幸福」になるための選択肢を全く略奪され、不条理な苦痛の中で生き、弱り、死ぬのである。その社会こそが、「幸福なる社会」から程遠い社会でもあるのだ。

このような「幸福なる社会」から遠い社会は虚構の物語や映画だけのことではないのを私達はすでに知っている。実際、国家が、自然に幸福であろうとする人間を、長い間組織的に監視し抑圧する形で存在してきた例は、簡単に見つけられるのである。2008年前半、各国での選挙の報道が多かった。2007年末に暗殺されたブット元首相の政党へのテロ行為が、警察の積極的な防止策も施行されずに続いたパキスタン、弾圧のもとに投票前から結果が分かっている大統領選挙があったロシア、これらの社会では、善き人の善き行為が迫害されているのは明らかである。自由と民主主義の国の代表として振舞うアメリカはどうだろう。同じく2008年のアメリカ大統領選で、二人の候補者が、国民の幸福の実現に働くと言いながら、報われていない大多数のアメリカ国民の酷い現状を例にあげて、アメリカ人の問題を全て解決していくのだといわんばかりに、変化をスローガンに掲げて闘っていた。変化を叫び続けるのをニュースで聞きながら、アメリカの大多数の人々も不正な政策を施行され、苦しい状況で見捨てられてきたことを世界に認めているようなものだったと思った。これが、長い間、「世界の警察」を自称して平和と正義の維持のために睨みを利かすというスタンスの外交を続けているアメリカだと思えば、滑稽でもある。自国内は、大多数の幸福を守る当たり前の状況からほど遠い状況だということなのである。しかし、今回の選挙で大きな変化を期待しているらしいアメリカ国民も、実際は完全な大多数の幸福の実現はないと、悟っているかのようであり、それもまた当たり前のことのものである。しかし、一番怖いのは、丁度、どちらの候補者も、演説の中に、「素晴らしきアメリカ」「誇るべきアメリカ」といったアメリカが結局は多くの世界の国より良いのだというフレーズを入れて喝采を浴びていたように、典型的、普通のアメリカ人も、「幸福なる社会」への距離では、自国はまだX国よりは絶対まだだから、という比較で納得しているという事実である。

そういった納得をした者が、一体全体「よく・生きる」ことで「幸福」になり、「幸福なる社会」を望んでいるのだと言うことに意味があるのだろうか。「幸福なる社会」の実現と個人の選択ということを考え始めた瞬間、実は普通の人々であり続けてきた自分自身の、「不特定多数の人々から必然的に成り立っている社会」への姿勢を見つめるしかなくなってくるのだ。そういう自分だって、X国と比較によって相対的には十分「幸福なる社会」に安住して、それを良しとしているのではないだろうか。日本の増え続ける自殺者のニュースを聞いたのはさほど昔でもないのに、それをどういう気持ちで聞いたのが、どうしても思い出せない。「国民の幸せを守る」と政治家が声高に言う時、本気でないように思われても、当たり前のように受け止めている。結局、日本でここ数年、何かと使われる「格差社会」という言葉が、どんな使われ方をされてもいやらしく響くのは、言葉にして、自分の生きている社会を論じる瞬間に、言葉を使う私を含めた私達自身が、苦痛にあえぎ不条理に幸福を妨げられている人々の存在を自明のこととして認めてしまっ

ている事実にある。そうした人々を最小限にする努力を試みないまま生きている私達自身の醜さが、その言葉を使った瞬間に、まさに焙り出されてくるからであろう。善き人でもなく、善き人を助けることもない私達は、選択の可能性に開かれていながら何もしないことで、「格差社会」を恥かしげもなく受け入れている。それでは、全てのものが才能と富をふくめて、全て均一であるように管理される社会が望ましいのかと問われれば、それも否である。自由な自然な発露としての人々の「よく・生きる」行為を許さないようになる管理社会では、遅からず善き人の善き行為も制限されていくのであり、幸福なる社会からはほど遠いのである。丁度、王子の街が自由に最低限の食べ物さえ維持できない人々であふれていたように、大尉の街で、思想を制限され自由なジョークさえも奪われた人々が、真実を語れないまま、盗聴を恐れ部屋でじっと言葉もなく見詰め合っていたように、どちらも幸福なる社会の姿ではないのである。確かに、比較すれば、「幸福なる社会」からほど遠いか、ちょっと遠いか、かなり「幸福なる社会」に近いとか、の違いがあるのだろう。しかし、本当に、個人が不条理の所為で幸福であるようことを止められていないゆえ、社会全体として見た時の幸福感の存在するような「幸福なる社会」を望み、そこに生きることを望むなら、そんな比較さえ実はほとんど意味がないということになる。「幸福なる社会」のために必要な、普通の人々である個人の選択とは、その個々の人間が、「幸福」の選択をしていく、つまり、自らのいる場から、可能な限りの最大限の「幸福なる社会」の実現に向けて絶えず関わっていくという覚悟なのである。

6. 「幸福なる社会」の実現と個人の覚悟

「幸福なる社会」の実現は、個々の個人の幸福の総和として実現するような単純なものではないことだけは確かである。ところが、それでは「幸福なる社会」の実現を異文化コミュニケーション教育ではどのように考えていくべきなのかと問われれば、前節の最後で述べてきたような、社会で不条理に幸福を妨げられている人々の数が最小であるように努力する個人の行為が最大限なされる社会が、少なくとも私達の目指すべき、そして実現する「幸福なる社会」なのだということが始まるだけなのである。同時に、それが十分条件なのではと感じている。そこでは、ともかく善き人の善き行為が社会の営みの中で妨げられることなく自然に為され、大きな成果をあげていこう。善き人が悲劇的な最期を迎えることなく、善き人を助ける人がその代償として喪失するものもない、そうした社会の実現には、個々人が、自らの生を「よく・生きる」過程で、不条理な理由で幸福になることを妨げられた人々の数を絶えず減らしていくことを目指すことが必要とされているわけで、当然、その過程で、個々人もまた「よく・生きる」ことで「幸福」を得ることができるのである。こうした個人の「幸福」の選択からなる「幸福なる社会」の実現について、異文化コミュニケーション教育を通して、学生達に考えさせるべきだという答えに、現時点では私は行き着いている。「幸福なる社会」の実現は、社会で善き行為を果たしていく、というコミットメント 時には、あの王子のように、自分の持てる時間を含む全てを捧げねばならないような、そうしたコミットメント をする覚悟無しにはあり得ないのである¹⁶⁾。

16) 一例を挙げてみる。平成20年3月31日午後、朝日放送の「スクランブル」という番組で、お花見の人々にぎわう東京の公園で空き缶を集める50歳代のホームレスの「ケンさん」と呼ばれる男性をカメラが追って特集していた。満開の桜の下でパーティをしている若者達が、「がんばれよ。」と言って彼に飲み物や食べ物を渡したり、空き缶を差し出したりしている様子を紹介した後で、「政治にはこの暖か

しかし、大きな問題は残されたままである。善き人の善き行為による他者への影響の違いである。「幸福なる社会のために覚悟を持つ」ことでは同じでも、王子のように自分の身を削る、作家のように自分の命の危険を犯す、弟のように武力でのレジスタンスに加わるでは、影響は大きく異なってくる。3つ目の場合、本来助けたい対象であったはずの人々が時には不本意な形で、本来は相当な覚悟が必要なコミットメントに巻き込まれてしまうという問題が突きつけられてくる¹⁷⁾。それゆえ、例えば、『善き人のためのソナタ』では、作家は、恋人を自分のコミットメントに巻き込まぬように、相当な努力を払っていた。また、その「不本意性」についても、当然、個別事例によって違ってくるゆえ、その都度考えていかねばならないだろう。さらに、異なる人々の国家や異なる民族の住む地域からなる世界では、それぞれの幸福なる社会のための選択ということに限っても互いに対立してしまうような選択肢も多々あり、現実の選択においては、人は往々にして自分とは異なる者達の幸福の実現を犠牲にしているという事実が存在する。幸福を選択する側にとっては、そうした異なる者達は身近な、自然に共感を重ねやすい対象でもなく、まして愛する対象でもないのであるから、選択はその個人にさほど苦痛や葛藤をもたらすものでもなく、難しくもないのである。善き人の善き行為というのは、どこまでをそう呼び得るものなのか、また、そうした文化の異なる人々の国家とそこに住む人々の幸福との関わりを異文化コミュニケーション教育ではどう考えていくべきなのかについては、次の機会を待って、さらに論を進めたいと考えている。

[2008. 9. 29 受理]

ささ見えなのはなぜでしょうね。」というようなコメントがされていた。このコメント自体には全く同感であるが、同時に、以下のことも事実であろう。この暖かい行為者である若者達も、花見の場でのそうした行為によって「善き行為」をする「善き人」となるわけでも、「善き人」を助ける行為者というわけでも全くないのである。彼等は、ただ花見を享受できる幸運を持った者として、同じ幸運に恵まれることなく缶を集める者に、人間らしい自然な感情や反応を見せたというだけに過ぎない。その人間らしい感情そのものが疑われる出来事が現在の社会に往々に見られるために、彼等の反応は確かに暖かいといえる。ただ「幸福なる社会」を目指し努力するということは、これとは違う次元の覚悟を持って始まる行為である。そして、それこそがコメンテーターが言うような、暖かくみえない政治の施行されている社会で必要とされているのである。さらに、同年7月末にも、同じ番組で、この「ケンさん」の、今度は花火大会での同様の空き缶集めの奮闘と周りの協力が放映されていた。人々の暖かさを指摘するコメントも同じである。ただ、このケンさんなる人と暖かい人々の反応を、間違いなく視聴者に好評であったために、今度は花火大会の時期を待って特集することは計画しても、3月から7月まで「ホームレス」のまま綱渡り的な暮らしを彼が続けないで済むような形につながる何らかの方法を「ケンさん」に示唆したり、援助を差し伸べたりすることには、TV局の関係者や視聴者の誰も考えはいかなかったらしい。これもまた違った次元の覚悟が必要とされるからである。

- 17) 映画の中で、弟は、本来彼らが助けようとしていたはずの側の人間、アイルランド人の若者を、裏切り行為によって処刑し、彼の母親から「もうあなたの顔を見たくない」と言われる。本稿で紹介したように、後に弟の恋人が兄にかけた言葉と全く同じ言葉である。この言葉が映画で意図的に使われているのは、明らかであろう。普通の人々を必然的に武力闘争に巻き込んでしまうこと、そして、そこにおいて裏切り行為をしない強さを、善き人が自分のレベルで期待するしかないこと、それらはフェアなことなのかという問いは、そもそも武力闘争は「幸福なる社会」の実現の方法として正しいのかどうかという問いとともに答えられる必要がある。